

## 三階教における発菩提心について： 同時代他宗派との比較を踏まえて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-07-10 キーワード (Ja): キーワード (En): Three Stages School of Buddhism, Sangai-kyō, Sanjie-jiao, Shingyō, Xinxing, Bodhicittotpāda, “Awakening of Mahāyāna Faith” , “Makashikan/Mohe Zhiguan” , Pure Land Buddhism 作成者: 柳井, 重久 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1249">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1249</a>

# Characteristics of *bodhicittotpāda* in the Three Stages School of Buddhism (Sangaikyō/Sanjie-jiao): A Study Based on Comparisons with Other Schools of the Same Period

YANAI Shigehisa

## Key words

Three Stages School of Buddhism / Sangai-kyō/ Sanjie-jiao / Shingyō / Xinxing / *Bodhicittotpāda* / “Awakening of Mahāyāna Faith” / “*Makashikan/Mohe Zhiguan*” / Pure Land Buddhism

## Summary

This paper aims to highlight the importance of *bodhicittotpāda* in the Sangaikyō, founded by Shingyō /Xinxing (540-594 CE). The paper fundamentally relies on studies by Teruma Nishimoto, such as “Studies of Sangaikyō,” and other theses as precedents.

Generally, *bodhicittotpāda* consists of (1) seeking enlightenment above and (2) saving others below. In other words, it consists of both self-training and altruism. In order to analyze how this definition can be applied to Sangaikyō, comparisons are made with the widely believed Buddhist schools in the era of China, examining texts such as “Awakening of Mahāyāna Faith” “*Makashikan/ Mohe Zhiguan*” of the Tiantai School, and the Pure Land Buddhism beliefs advocated by Donran/Tanluan (476?-542? CE), Dōshaku/Daochuo (562-645 CE) and Zendō/Shandao (613-681 CE).

For the purpose of these comparisons, *bodhicittotpāda* is classified according to two aspects: Essence/Causes, and Capacities/Practices. Essence is what *bodhicittotpāda* is, Causes refers to triggers or conditions, Capacities concern the abilities of each specific practitioner, and Practices is what one does to reach your goal or aim. In this study, the characteristics of *bodhicittotpāda* in these beliefs

(2)

were mainly found in the aspects of Essence and Practices.

Of the beliefs stated above, “saving others,” or altruism, is acknowledged in Essence. However, differences can be seen in the category of “Practices” as follows. In Sangaikyō, the texts emphasize self-training, as distinguished from altruism. Herein, a person regards oneself as a man of lowest Capabilities, who has a completely evil existence, and regards others as being good. Therefore, the distinctions between oneself and others is clearly drawn.

As for Practices in the Awakening of Mahāyāna Faith, even for the third level out of the three *bodhicittotpāda* capabilities, the practice of saving others is required. The completion of this level is, however, to take ten thousand kalpa. Therefore, this text is not optimistic when compared to Sangaikyō.

In the *Makashikan*, saving others is fundamental, as found in its descriptions of Essence and Causes. In addition, the Tiantai School emphasizes the indivisibility of oneself and others, which is remarkably different from the concentration on self-training seen in the Sangaikyō. However, in terms of the Practices aspect, delays in saving others exist, as was found in the Awakening of Mahāyāna Faith.

Regarding Pure Land Buddhism, Donran and Dōshaku both advocate that *bodhicittotpāda* is the premise of rebirth in Pure Land. However, according to the Pure Land Buddhism of Zendō, a lower level person can obtain *bodhicittotpāda* after rebirth. Some similar virtue can be inherent within them, from which the chanting of the name of Buddha (Practices) can lead to the conversion of others.

*Bodhicittotpāda* is essential for all the facets of Buddhism stated above. At the same time, Sangaikyō should be distinguished for its Practices, which emphasize self-training, while other schools admit for delays in the completion or acquisition of *bodhicittotpāda*.

三階教における発菩提心について  
——同時代他宗派との比較を踏まえて——

柳井重久

# 三階教における発菩提心について

——同時代他宗派との比較を踏まえて——

柳井 重久

〈キーワード〉 三階教／信行／発菩提心／『大乘起信論』／『摩訶止観』／浄土教

## 1. はじめに

本論文は、信行（540-594）を開祖とする三階教の発菩提心の特徴について、中国におけるほぼ同時代の他宗派との比較を交え考察するものである。本論述の先行研究として、西本照真の著作、論文（『三階教の研究』<sup>1)</sup>等）を基礎におく。

新たに三階教文献として特定された資料を含め、西本の研究によって三階教の全体像は明確になってきた。一方で、同時代の他宗派との比較研究がまだ進んでいないと思われるため、本論文ではその点を新機軸として焦点を当てている。特に三階教の修行法に見られる他宗派と比べての独特な主張が、三階教全体を異質なものにしているのか否かについても考察していきたい。

## 2. (発) 菩提心とは何か

まず、中国仏教に限らず(発)菩提心とは何かについて概観する。田上太秀は、bodhicittaの語は原始仏教文献に見られず、菩提心が「大乘仏教特有の用語である」という<sup>2)</sup>。田上は『二万五千頌般若』を例にとり、「菩提心とは『正覚』への願望」である(上求菩提)とともに「無数の衆生を涅槃界に導こうとすること」であり(下化衆生)それはすなわち「誓願心」であって<sup>3)</sup>、「無上正等菩提へ一切衆生を導くことの発願」を發菩提

(4)

心であるとする<sup>4)</sup>。

田上は論書における菩提心を次のように特徴づける。まず『大乘起信論』では「真如薰習因縁、諸仏慈悲因縁、それに衆生仏因縁」という「内外両条件」の「三縁和合して菩提心は生起される」と説く。これに対して『摩訶止観』は「自力とか他力とか分別して因縁を考えるならばいずれの発心も成立しない」「なぜならば、発心は自他ともに感応和合して成立するから」であるという<sup>5)</sup>。

田上はまた上求菩提と下化衆生の時間的前後関係について「大乘經典の初期のものを見るかぎりでは、自利、つまり自らがさきにさとりを得てからのちに、利他のための誓願を成就しようと精進する」傾向があるという<sup>6)</sup>。初期大乘經典に関し、田上は「最初期成立の大乘經典と考えられ、しかも原典が現存するものとしては、『金剛般若経』『大宝積経迦葉品』『八千頌般若』『無量寿経』『法華経』『十地経』『入法界品』など」を挙げている<sup>7)</sup>。『法華経』における「時間差を伴う利他」について、天台の発菩提心の項で後述したい。

以下で、三階教、『大乘起信論』、『摩訶止観』を中心とする天台思想、並びに浄土教の（発）菩提心について比較考察を行っていきたい。

### 3. 三階教における発菩提心の位置付け

#### 3.1. 『発菩提心法』

三階教の発菩提心に関する文献として、ポール・ペリオ（1878-1945）の収集した敦煌漢文写本に三階教文献として紹介され、西本によって『発菩提心法』と名付けられたものが基本的文献と位置づけられる。ここで説かれている教説の特徴は大きく二つある。

- ①他人の悪についてはこれを見てはならず、死人の目と同じようにあるべきである（「死人仏法」と呼ばれる）。
- ②儒教や道教といった外道にも好悪の評価を与えてはならず、敬うべき

対象には外道の人や思想も含まれている。

これらは「当時の仏教思想の中でも極めて斬新なものである」とされる<sup>8)</sup>。

この『発菩提心法』の中では、「四種悪具足人発菩提心法」「十悪未除衆生発菩提心法」「十種悪具足人発菩提心法」「発菩提心浅深法」の四種の発菩提心法が挙げられている。このうち、2番目の「十悪未除衆生発菩提心法」（十悪を未だ除いていない衆生の発菩提心法）には以下のように説かれている。

一者、頓修一切善、頓断一切悪。如『維摩経』八法、『涅槃経』直心法中説。

第一に、すぐに一切の善を修め、一切の悪を断て。『維摩経』の八法、『涅槃経』の直心法中で説くように。

二者、頓捨世間、頓学出世間。所謂、一切悪事自受、好事与他、眼観一切悪色、耳聴一切悪声、鼻嗅一切悪香、舌食一切悪味、身受一切悪触、心縁一切悪法。悪法者、四念処悪、苦集諦悪、十二因縁悪、七漏悪、十想等法界悪法是。

第二に、すぐに世俗を捨て、すぐに悟りの境地に入ることを学べ。つまり、一切の悪事を自ら受け、好事を他に与え、眼には一切の悪しき事物を観て、耳には一切の悪しき声を聴き、鼻には一切の悪しき香を嗅ぎ、舌には一切の悪しき味を食し、身には一切の悪しき感触を受け、心には一切の悪しき法を対象とせよ。悪しき法とは、四念処悪、苦集諦悪、十二因縁悪、七漏悪、十想等法界悪法といったものである。

三者、頓捨小乘、頓学大乘 於内復有四子段。一頓捨親疎、頓学平等。二頓捨自利、頓修利他。

(6)

第三に、すぐに小乗を捨て、すぐに大乘を学べ。この中にまた四つの小段が有る。第一にすぐに親しいか疎遠であるかを捨て、すぐに平等を学べ。第二にすぐに自利を捨てすぐに利他を修せ<sup>9)</sup>。

第1番目の中で挙げられている、『維摩経』の八法を例にとると――

維摩詰言。菩薩成就八法。於此世界行無瘡疣生于淨土。何等爲八。  
(1) 饒益衆生而不望報。(2) 代一切衆生受諸苦惱。所作功德盡以施之。  
(3) 等心衆生謙下無礙。(4) 於諸菩薩視之如佛。(5) 所未聞經聞之不疑。不與聲聞而相違背。(6) 不嫉彼供不高己利。而於其中調伏其心。  
(7) 常省己過不訟彼短。(8) 恒以一心求諸功德。是爲八法<sup>10)</sup>。

維摩詰は言われた。菩薩は八法を成就する。この世界に於いて行をおこない、傷を負うことなく浄土に生まれる。八とは何か。(1) 衆生を利益し、しかもその報酬を望まない。(2) 一切衆生の諸々の苦惱を代わりに受ける。自ら得た功德はことごとく施す。(3) 心を衆生と等しくして、謙虚であり自由自在である。(4) 諸々の菩薩を見るにあたって佛を視るように視る。(5) いまだ聞いたことのない経もこれを疑わない。声聞と同調することはなくても、これに背いたりしない。(6) 他人の供養を羨んだりせず、自分の利に高ぶったりせず、受け取った範囲で自分の心を調える。(7) 常に自分の過ちを省みて、他人の欠点を批判しない。(8) 常にひたすらに諸々の功德を求める。これが八法である。

(数字は引用者付与)

とある。この箇所は、吉蔵撰の『維摩経義疏』に

前四化他。後四自行。前四即慈悲喜捨<sup>11)</sup>。

前の四は化他。後の四は自行。前の四は即ち慈悲喜捨。

と積されている。「十悪未除衆生発菩提心法」において、『維摩經』を教証としつつ、利他が標榜されていることがわかる。

上記『発菩提心法』中の4種の発菩提心法の4番目「発菩提浅深法」は、西本によって『敦煌秘笈』に収められている『人集録明諸經中对根浅深発菩提心法』（以下『対根浅深発菩提心法』）との一致性が明らかになっており<sup>12)</sup>、ともに4つの大段に分かれている。『対根浅深発菩提心法』の各大段は以下の構成である（カッコ内は「発菩提心浅深法」での名称）。

- ①第一大段、明発菩提心寛狭長短法（第一発菩提心寛狭浅深法）  
普歸三宝、普度衆生、普断一切悪、普修善尽を説く。発菩提心の内容を明かしている。
- ②第二大段、明発菩提心寛狭因浅深法（第二発菩提心因浅深法）  
見仏の因、聞法の因、帰依僧の因、度衆生の因、離悪の因、修善の因の六段からなり、発菩提心の原因・条件を明かしている。
- ③第三大段、明発菩提心能受根機浅深法（第三能受根機浅法）  
発菩提心の主体となる根機（能受の根機）を明かしている。
- ④第四大段、明発菩提心対根起行浅深法（第四対根起行浅深法）  
下根の衆生に焦点を当ててその実践の法を明かしている<sup>13)</sup>。

（下線は引用者）

各大段は、「菩提心とは何か、それがなぜ生じるのか」（【内容・原因】）、及び「菩提心のための修行とそれに対応する根機」（【修行・根機】）に大別できると思う。

第一大段は本質である【内容】／第二はそれが生ずる【原因】、第三は【根機】／第四は【修行】とまとめることができるであろう。

『対根浅深発菩提心法』において一番多くの分量は第四段「明発菩提心対根起行浅深法」に充てられ、「下根の菩薩に焦点をあててその実践の法

(8)

を明かしている」。三階教發菩提心法の【修行】と言えるこの段は

- ①下根の菩薩が法師を敬う法
- ②下根の菩薩が知るべき邪正の分齊の法
- ③下根の菩薩の帰依すべき善知識の法
- ④下根の菩薩の菩提の種子の法
- ⑤下根の菩薩の受ける菩薩戒と護戒の法
- ⑥下根の菩薩が菩薩の行を行じる法
- ⑦下根の菩薩の説法の法
- ⑧下根の菩薩の三宝を敬う法
- ⑨下根の菩薩の苦行に関する法

から成っている<sup>14)</sup>が、例えば⑥において

第六明下根菩薩行菩薩行者、如『維摩經』説。何以故。淨穢相對、淨土是上、穢土是下。若為淨土菩薩菩薩行、明知所為者是上人、既為穢土菩薩請菩薩行、明知所為者即是下人、是故知為下根菩薩説<sup>15)</sup>。

第六に、下根の菩薩の行ずる菩薩行を明らかにするとは、『維摩經』が説いているごとくである。どのようなことだろうか。淨と穢は相對し、淨土は上であり、穢土は下である。もし、淨土の菩薩の菩薩行を為すならば、その行為は上人のものであると明らかに知れる。既に穢土の菩薩が菩薩行を願うということは、その行為は下人のものであると明らかに知れる。このために、下根の菩薩の説くことであると知れるのである。

とあって、以下に上述の『維摩經』の八法が挙げられている。第四大段(=發菩提心の【修行】)のすべてに亘って「慈悲喜捨」「化他」が説かれているのか。下根の菩薩の行は上の菩薩の行と區別されており、この点は

次項における『対根起行法』において強調される自利行の優先に繋がっていくと考えられる。三階教の発菩提心の【内容・原因】としては度衆生が標榜されているものの、【修行】においては上根の者と下根の者が区別されていると考える。

### 3.2. 『対根起行法』<sup>16)</sup> 及び『制法』

三階教の根本文献である『対根起行法』には「菩提心を発するための見法と行法」が説かれている。

見法には「他の一切の善悪の衆生に対してはただ善の理解をなし、その悪を見ない。もし一切の破戒の衆生を見ても、その悪を見ない。」「自身については善悪を問わずあまねく悪の理解をなす。」<sup>17)</sup> という「普敬と認悪」が説かれている。三階教の鍵概念である「普敬・認悪」が発菩提心の基礎であることがわかる。

行法（【修行】）は普敬・認悪（及び空観）から成り、「普敬」には如来蔵を含む八つの段がある。常不軽菩薩の「ただ〔礼拝讃嘆の〕一行だけを行い、自分以外に対してだけ如来蔵・仏性・当来仏・仏想仏などとして敬った」という「一人一行仏法」が六段目に認められるが、この八段には『発菩提心法』で述べた「死人仏法」の思想が通底している<sup>18)</sup>。「認悪」には「その中に十二種がある」とされるが本論文で特に注目するのが第十一の「三十二種偏病」であり、「仏法を実践するのに自利と利他を行おうとする顛倒」であり、「その中に三十二がある」<sup>19)</sup>とされること、つまり利他行に否定的であることである。

また、三階教の文献で信行の著したとされる『制法』における「悪世界悪時悪衆生出世行法」（すなわち三階教の焦点である）の部分には次のようにあって、ただ自利の行を行えとある。

唯得学一切自利行。一唯得一人。二唯得一行。三唯得観一境界。四唯学一相続。五唯得一身業、不得多遊行。六唯得一口業、不得多語言。七唯得一意業、不得多覚観<sup>20)</sup>。

ただ一切の自利行を学ぶべきである。一にただ一人であるべきである。二にただ一つの行であるべきである。三にただ一つの境地を観るべきである。四にただ一つの連続した流れを学ぶのである。五にただ一つの身体的行為であるべきであり、多くの遍歴であるべきではない。六にただ一つの言語的行為であるべきであり、多くの言葉であるべきでない。七にただ一つの心意的行為であるべきであり、多くの覚観（心の粗いはたらきや細かいはたらき）であるべきでない。

ただし、『対根起行法』では第三階（「空見や有見の顛倒して邪見に満ちた九種の根機」の出世間に至る道について七段を定め、その中には

四には一切の衆生を救い尽くす<sup>21)</sup>。

というものがある。三階教の修行者が出世間を目指すにあたり、利他が標榜されていないわけではない。それは『対根浅深発菩提心法』において『維摩経』の八法が全体像として示されていることにも通じている。ここではひとまず「下根の者の修行の過程では、利他を行じてはならない」というのが三階教の修行論であると仮定しておきたい。この「積極的禁止」の表明は三階教の特徴であると思われるが、ある程度善導浄土教に通底する思想なのではないかという点を後述する。

#### 4. 『大乘起信論』における発菩提心

この論書において、発菩提心は「仏たちが証明したさとり（道）に向けて、人々が意欲を起し、修行を前進させていく意義を明らかに」するために説かれている<sup>22)</sup>。三階教の発菩提心の【内容・原因】に相当すると言える。この中で発菩提心は信成就発心、解行発心、証発心の三つに分類され、この三段階を通じて、「信・解・行・証のそれぞれの場面で、新たな

問題をともなうその都度点検されなければならない問題」が発心であるとされる<sup>23)</sup>。

信成就発心を見ることによって、三階教の発菩提心の【内容・原因】、及び【修行・根機】との比較を見てみたい。

まず【根機】については以下のように説かれている。

三者證發心。信成就發心者。依何等人修何等行。得信成就堪能發心。所謂依不定聚衆生<sup>24)</sup>。

信成就発心とは、どのような人について、どのような行を修し、信が成就して発心することであるのか。所謂、不定聚の衆生についてである。

【原因】については次の通りである。

有熏習善根力故。信業果報能起十善。厭生死苦欲求無上菩提。得值諸佛親承供養修行信心。經一萬劫信心成就故。諸佛菩薩教令發心。或以大悲故能自發心。或因正法欲滅。以護法因緣能自發心。如是信心成就得發心者。入正定聚畢竟不退。名住如來種中正因相應<sup>25)</sup>。

薰習と善根の力があるために、業の果報を信じて十善を起し、生死の苦を厭って無上の菩提を欲求し、諸仏に値うことを達成し、親承し供養して、信心を修行するのである。一万劫を経て信心が成就するため、諸仏と菩薩が教えて発心させ、或いは大悲によって自から発心し、或いは正法が滅そうとするために、護法の因縁によって自から発心するのである。このように信心が成就して発心を得た者は、正定聚に入って、後退することなく、如来種の中に住んで正因と相應すると名づけるのである。

発菩提心の【内容】とは何か。

復次信成就發心者。發何等心。略説有三種。云何爲三。一者直心。正念眞如法故。二者深心。樂集一切諸善行故。三者大悲心。欲拔一切衆生苦故<sup>26)</sup>

また次に信成就發心とはどのような心を發するのか。略説すれば三種がある。三とは何か。一には直心である。正しく眞如の法を念ずることである。二には深心である。願って一切の諸善の行を集めることである。三には大悲心である。一切の衆生の苦を抜かんと欲することである。

その【修行】は以下のように説かれている。

一者行根本方便。謂觀一切法自性無生。離於妄見不住生死。觀一切法因縁和合業果不失。起於大悲修諸福德。攝化衆生不住涅槃。以隨順法性無住故。二者能止方便。謂慚愧悔過。能止一切惡法不令增長。以隨順法性離諸過故。三者發起善根增長方便謂勤供養禮拜三寶。讚歎隨喜勸請諸佛。以愛敬三寶淳厚心故。信得增長。乃能志求無上之道。(略)四者大願平等方便。所謂發願盡於未來。化度一切衆生使無有餘。皆令究竟無餘涅槃<sup>27)</sup>。

その修行法を略説すれば四種ある。四とは何か。

一は行の修行法の根本である。つまり、一切の法の自性は無生であると觀じ、妄見を離れて生死に執着せず、一切の法は因縁が和合して業による果は失することはないと觀じ、大悲を起こし、諸の福德を修め、衆生を救い導き涅槃に安住しない。法性が無住であることに従うためである。

二は能止の修行法である。つまり、懺悔して、一切の惡法を止めて、増長させないことである。法性が諸過を離れることに従うためである。

三は善根を發起して増長する修行法である。つまり、つとめて三宝を供養し、礼拝し、諸仏を讚歎し、随喜し、勧請することである。三宝を愛敬する思いが厚い心のために、信が増長し、無上の道を志すのである。(略)

四には大願平等の修行法である。つまり、発願して、未来に亘って一切の衆生を救い導く上で漏れがなく、皆無余涅槃を極めさせるのである。

(下線は引用者)

この箇所は、不定聚の衆生という【根機】を前提に説かれている。「腰がさだまらず、どう転ぶかわからないあやうい人」が「内からはたらきかけるよい能力を啓発する力にうながされて、仏の教えに出会い、時間をかけて実践しているうちに正しい理解が確立する」<sup>28)</sup>ということ、大乘起信論について前述の田上の言うような「内外の条件」が示されている。

三階教との比較において、三階人と不定聚の衆生とは共通する部分も認められるが、「内からはたらきかけるよい能力を啓発する力」という点が大きく異なるように思う。三階教では「善いもの」は全て他者にあるのであって、自らには悪しか存在しない。また、三階教の【修行法】に見られる「利他行を顛倒とみること」も認められない。

一方、『大乘起信論』においても上記の「信心の成就」は一万劫を経たのちに達成することになる。一万劫の後に信心が成就することを目指し一進一退を繰り返しながら修行すること。これは三階教の思想に比べ、自己について楽観的であるわけではないであろう。他者の救済は一万劫の後に向けて目指されるものである。確かに『大乘起信論』では「内なる善」を想定しているのであるが、利他の心というものが膨大な時間の後に初めて生ずるものである、という点において、必ずしも三階教と相反するものではない。そして、利他というものがそもそも菩提心の【内容】において標榜されていることは重要である。

『大乘起信論』において、発心は解行発心、証発心と段階を進めていくのであるが、これは後述する天台思想の「六即」と通じると考える。

## 5. 天台思想（『摩訶止観』等）における発菩提心

『摩訶止観』では、正しい発心が「『四諦』と、『四弘誓願』と、『六即』の説の三段で示されている」。

四諦とは、「仏の側からの説き方と、衆生の側からの理解の仕方とを視野に入れ、四諦を、生滅の四諦（蔵教・界内の事教）・無生滅の四諦（通教・界内の理教）・無量の四諦（別教・界外の事教）・無作の四諦（円教・界外の理教）の四種で解する」手法であり、「相手に応じ、能力に応じて、理解の仕方にも異なりがあることを認める」思想である<sup>29)</sup>。三階教『対根浅深発菩提心法』第三大段「発菩提心能受根機浅深法」における【根機】の概念に通底すると言えるだろう。

四弘誓願は「真正な菩提心の所在を『四弘誓願』を立てることによって明示する」<sup>30)</sup>すなわち【菩提心の内容】であり、『対根浅深発菩提心法』第一大段「発菩提心寛狭長短法」に近い。ここでは度衆生が『摩訶止観』の前提になっていると言えるであろう。

六即とは「仏道修行が凡夫に始まり、聖人に終わることを示し」「凡夫に始まるので、どんな人も勇気を出して仏道修行へと誘われ、聖人に終わる」と説かれる。例えば「観行即」は「知ったように納得するまで仏道修行のなかで主体的につきつめていくことである。聞いた教えは実践の場面で検証されない限り自分のものにはならない道理」<sup>31)</sup>である。凡夫を励ましつつ修行を説いているという点で『対根浅深発菩提心法』第四大段「発菩提心対根起行浅深法」【修行】に通底すると言える。しかしながら、凡夫が聖人へと至る可能性を内在しているという考え方は三階教とは異質であろう。

三階教と天台思想との相違点は、自他の分別にも認められる。先述の通り、『摩訶止観』においては「自力とか他力とか分別して因縁を考えるならばいずれの発心も成立しない」と説く。

問。行者自發心他教發心。答自他共離皆不可。但是感應道交而論發心耳<sup>32)</sup>。

問う。行者はみずから発心するのか、他に教えられて発心するのか。答える。自・他・共・離はみな不可である。ただ感應道交にして発心を論ずるのみである。

この点は三階教の普敬認惡の自他の峻別と大きく異なる。もっとも天台思想においても自利と利他に時間差は想定されており、高橋理空はその論文「発菩提心についての一考察」<sup>33)</sup>において、『法華経』「譬喩品」の次の箇所を引用し天台の発菩提心を解釈する。

爾時諸子聞父所說珍玩之物。適其願故心各勇銳。互相推排競共馳走爭出火宅。是時長者見諸子等安隱得出。皆於四衢道中露地而坐。無復障礙。其心泰然歡喜踊躍。時諸子等各白父言。父先所許玩好之具。羊車鹿車牛車願時賜與。舍利弗。爾時長者。各賜諸子等一大車<sup>34)</sup>。

その時に諸子は、父の説く珍重されている品物について聞き、各々心を躍らせて互いに押し合いし、競って共に走り争って火宅を出た。その時に長者は、諸子が安全に出たために四街道の中の露地で、坐って問題が無いことを見て、その心は落ち着きつつも歡喜勇躍した。その時に諸子は、各々父に言った。先ほどお許しのあった珍重な品物である、羊車、鹿車、牛車をどうか賜りますように、と。舍利弗よ、その時長者はそれぞれ等しく大車を賜ったのである。

高橋によれば、上記箇所は『摩訶止観』の以下の箇所と対応するという。

衆生雖如虛空。誓度如空之衆生<sup>35)</sup>。

若偏觀空則不見衆生可度。是名著空者<sup>36)</sup>。

雖空而度雖度而空。是故名誓與虛空共闢。故名眞正發菩提心。即此意也<sup>37)</sup>。

衆生は虚空のごときものであるが、空のごとき衆生を度すことを誓う。もしひとえに空のみを觀ずるならば、すなわち衆生が度すべきであることを見ない。これを空に執着する者と名づける。

空ではあるがしかも度し、度すといえどもしかも空である。このゆえに誓って虚空と共に闢うと名づけるのであり、ゆえに眞正の發菩提心と名づけるということは、すなわちこの意味である。

高橋は、「一度は三界からの得度を完成しなければいけないが、彼岸へ得度を完成する前から常に実相と見て、衆生をいずれば救わなければいけない、救う為に衆生無辺誓願度の心を持つ事、衆生の位を捨てる気は無い事、衆生を捨てない心が初めから育っている事」が大乗の發心であるといい、これは諸子／衆生の立場から見れば【修行】を指し、まずは羊車等を経るものの、そこには大乗の衆生救済が標榜されているとの意味であろう。三階教の修行論における自利への專念とは異なっていると言えるだろう。

「小乘・大乗に時間の差はあっても、最終的には三界六道の衆生は池に映る水月で、真月ではないが、偽物を救う必要が無いのではなく、偽物だからこそ救う必要があるとの理解が、大乗の佛果を求めての發心として必要になってくる。」<sup>38)</sup> とするが、これは仏の救済の側面から見た發菩提心の【原因】ということであろう。天台思想においても、時間差を前提とするものの、衆生による衆生の救済ということが当初から視野に入っているとと言える。

『摩訶止觀』における正しい發菩提心とは、1「種種の理を推して」2「仏の種種の相を見て」3「種種の神通を觀」4「種種の法を聞き」5「種種の土に遊び」6「種種の衆を觀」7「種種の行を修するを見」8「種種の法の滅するを見」9「種種の過を見」10「種種の苦を受くるを見」、しかし

て菩提心を発す」ことの十種であるという<sup>39)</sup>。これらは、発菩提心の【原因】であるとみなし得るだろう。ここで、例として1番目と2番目の発菩提心に関する記述を見てみたい。

云推理發心者。法性自天而然。集不能染苦不能惱。道不能通滅不能淨。如雲籠月不能妨害。却煩惱已乃見法性。經言。滅非眞諦因滅會眞。滅尚非眞三諦焉是。煩惱中無菩提菩提中無煩惱。是名推生滅四諦上求佛道下化衆生發菩提心<sup>40)</sup>

理を推しはかって発心するということはどういうことか。法性というものがおのずからありのままに、集が染めたり悩ましたりすることができないということである。道が通ずることもできず、浄めたりすることもできない。それは雲が月を覆っても月そのものを妨害することができないようなことである。煩惱を破却すれば、そこに法性を見る。『涅槃經』が言うには、滅は眞の諦ではなく、滅によって眞の諦に会うのである。滅は眞諦ではなく、その他の三諦も眞諦ではない。煩惱の中に菩提はなく、菩提の中に煩惱はない。このように生滅の四諦を推しはかって、上に仏道を求め、下に衆生を化する発菩提心と名づけるのである。

觀佛相好發心者。若見如來。父母生身身相昉著。明了得處輝麗灼爍。毘首羯磨所不能作。勝轉輪王相好纏絡世間希有。天上天下無如佛。十方世界亦無比。願我得佛齊聖法王。我度衆生無數無央。是爲見應佛相好上求下化發菩提心<sup>41)</sup>。

仏の相好を觀て発心するということはどういうことか、もし如来を見て、父母から受けた生身の身相が明らかではっきりと処を得て光り輝き、毘首羯磨も作ることができないほどであり、轉輪王の相好をまとして世間にもまれなのにも勝り、天上天下に仏のごときものは無

く、十方世界に比べるものはない。私が仏となって聖法王にひとしく、無数の衆生を度することを願う。応仏の相好を見て上求下化の菩提心を発するとはこのようなことである。

『摩訶止観』における十種の正しい発菩提心において、上求下化の語は上記十種発菩提心の1と2に見られるが、5以降について「前に例して解すべし、また委しく記さず」<sup>42)</sup>とされている。十種の【原因】すべてにおいて下化衆生が当初の段階から射程に入っている。

## 6. 浄土思想における発菩提心

小林尚英は、『無量寿経』における上輩、中輩、下輩それぞれにおける発菩提心を比較し「上輩、中輩、下輩のいずれのものも菩提心を発して浄土に往生すべきことを説いている」<sup>43)</sup> (傍点引用者) ことに注目する。

其上輩者。捨家棄欲而作沙門。發菩提心。一向專念無量壽佛。修諸功德願生彼國<sup>44)</sup>。

その上輩の者は、家を捨てて欲を棄て、沙門となる。菩提心を発し、一向に専ら無量寿仏を念じて諸の功德を修め、浄土に生まれたいと願う。

其中輩者。十方世界諸天人民。其有至心願生彼國。雖不能行作沙門大修功德。當發無上菩提之心。一向專念無量壽佛。多少修善。奉持齋戒。起立塔像。飯食沙門。懸繪然燈。散華燒香。以此迴向願生彼國<sup>45)</sup>。

その中輩の者は、十方世界の諸天人民に至心があつて浄土に生まれたいと思うなら、沙門になり大いに功德を修めるということがなくても、まさに無上菩提の心を発するのである。一向に専ら無量寿仏を念じ、多少の善を修めて齋戒を奉持し、塔像を起立して沙門に食を施

し、きぬを懸けて灯を燃やして、華を散じて焼香するのである。このように廻向して浄土に生まれることを願うのである。

其下輩者。十方世界諸天人民。其有至心欲生彼國。假使不能作諸功德。當發無上菩提之心。一向專意乃至十念。念無量壽佛願生其國<sup>46)</sup>。

その下輩の者は、十方の世界の諸天人民に至心があって浄土に生まれたいと思うなら、たとえ諸の功德をなすことができなかつたとしても、まさに無上菩提の心を発し、一向に意を専らにして、ないし十念し、無量寿仏を念じて浄土に生まれたいと願うのである。

このように、往生の前提に発菩提心があることが説かれている。次に曇鸞(476?-542?)、道綽(562-645)、善導(613-681)の論書における発菩提心を見てみたい。この三人の中では道綽が信行の同時代人である。

小林は、曇鸞が『往生論註』において「三輩の往生については優劣があるけれども、どれ一つとして無上なる菩提の心を発さないものはない」と説いていることを挙げ、「仏となろうと願う心はとりもなおさず衆生を救済しようとする心である」<sup>47)</sup> これまでの区分で言えば、【内容・原因】に相当するだろうか。「念無量壽佛願生其國」は【修行】と同定できる。同論書の該当箇所は以下の通りである。

案王舎城所説無量壽經。三輩生中雖行有優劣。莫不皆發無上菩提之心。此無上菩提心即是願作佛心。願作佛心即是度衆生心。度衆生心即攝取衆生有佛國土心。是故願生彼安樂淨土者要發無上菩提心也。若人不發無上菩提心。但聞彼國土受樂無間。爲樂故願生。亦當不得往生也<sup>48)</sup>。

(下線は引用者)

無量寿經の王舎城の所説を考察すると、上輩・中輩・下輩の中に行の優劣はあるが、皆発菩提心の心を発さないものはない、この無上菩提

心はすなわち仏心をなそうと願うことであり、仏心をなそうと願うことはすなわち衆生を救おうとする心であり、衆生を救おうとする心とはすなわち衆生をおさめ取って有仏の国土に生まれさせる心である、このために、かの安楽な浄土に生ずると願うことは、要するに無上菩提心を発するということである。もし人が無上菩提心を起こさないのであれば、浄土で受ける楽しみが絶え間ないと聞くだけである。樂の為に往生を願うために、まさに往生を得ることはない。

一方で、小林は『観経』において「上品と中品において願往生の文があって、下品にはそれがなく、往生後の発菩提心を説いている」「下品の者にとって発菩提心は往生後」とされていることを指摘する<sup>49)</sup>。これは【根機】による【修行方法の差】が強調されていると言えるだろう。

道綽については、「曇鸞より影響を受け」ている思想が『安楽集』に認められる<sup>50)</sup>。

大經云。凡欲往生淨土。要須發菩提心爲源<sup>51)</sup>。

『無量寿経』が言うには、およそ浄土に往生することを欲するなら、必ず発菩提心を根本としなければならない。

すなわち、「願往生の前提条件として発菩提心が必要」<sup>52)</sup>とされていることが見て取れ、「願往生心を菩提心であると解釈してさしつかえないと思われる」<sup>53)</sup>。

これに対して善導浄土教では「往生後の還来廻向による度衆生が発心である」「『観経』に説く下品者の発心に相通ずる」<sup>54)</sup>と、発菩提心は往生の後になるという。

岡崎秀麿によれば『観経』下品に関する善導の発菩提心観とは、以下のようなものである。「上品下生に対する善導の註釈を見るならば、『発菩提

心』は衆生教化、いわば菩薩道を志向するような心であると規定されている。曇鸞において『無上菩提心』が願作仏身・度衆生心と規定されていることと同様の理解であろう。このような菩提心を下品生のものは発すことができず、浄土往生後に発すと『観経』では説かれている<sup>55)</sup>。善導の『観経疏』では

此三品人俱在彼發心。正由聞大即大乘種生<sup>56)</sup>。

この下品の人は、ともに浄土において発心する。まさに大なる教えを聴いて、大乘の種が生まれる。

と述べられている。この「下品生のもの」は三階教の第三階人と極めて親和性が高いと考える。柴田泰山も、「善導が少なからず三階教から影響を受けていた」と指摘する<sup>57)</sup>。三階教の【修行】において三階人の利他行が否定されていることと、善導浄土教で下品性のものに度衆生が叶わないこととは通底し合うであろう。善導の『往生礼賛』においては

又到彼國已。得六神通。回入生死。教化衆生。徹窮後際。心無厭足。乃至成佛。亦名回向門<sup>58)</sup>。

また浄土に行ってから、六つの神通を得る。生死の世界に戻ってきて、衆生を教化する。未来永劫に厭きることがなく、そして仏となる。また回向門と名付ける。

とあり、「善導は下品下生のものが称名一行によって浄土往生していく中で、その信心である三心の廻向発願心の中に菩提心と同様の意味を担っていた」ものの「あくまで下品のものが『菩提心』を発すとまではいえず、そうした徳が既に信心の内に内在しているとしても言う範囲」とどまり、「下品のものが称名によって往生すれば、他の上品のものと同様

に衆生教化が可能」であるというのが岡崎の見解である。一方で「善導にとって上品であろうと下品であろうと、往生以前の『菩提心』は不可欠なものであった」<sup>59)</sup> ことから考えると、善導浄土教においても、下品のものの称名が菩提心とまったく切り離されたものであると考えることは不適当であろう。

## 7. 結 語

以上、三階教と他の宗派との比較を行ってきたが、『大乘起信論』、『摩訶止観』等の天台思想、並びに曇鸞・道綽・善導の浄土教の発菩提心は、【内容・原因】すなわち発菩提心の本質と言えるものについては上求菩提と下化衆生の双方が求められ、標榜されている。従って三階教の発菩提心も当時の仏教世界において異端の存在ではないということを示せたものと考ええる。

一方で、【修行・根機】を中心にそれぞれの発菩提心には以下の差異を特徴づけられたものと思う。

- ・ 三階教は自他を峻別し、下根の者である自己（【根機】）にひたすら悪を認め、自己の内面の善については否定的である。一方で他者にはひたすら善を見ろという自他の峻別が求められる。【修行】に関しては、自利行に専念すべきことが明言されている。
- ・ 『大乘起信論』の思想において、不定聚（という【根機】）の衆生の起こすべき発心、信成就発心の【修行】においても大悲、衆生の化度が標榜されている点で三階教との異なりを見せる。なお「一万劫を経て信心が成就する」とされており、三階教に比べて著しく楽観的であるわけではない。自他は「ともに感応和合する」とされおり、三階教に見られる自他の峻別の側面は希薄である。
- ・ 『摩訶止観』等に見られる天台思想の発心では、特に六即において凡夫から聖人への発展が標榜されており（【修行と根機】）、三階教の自

己にひたすら悪のみを認めることと大きく異なる。この点は『法華経』「譬喩品」に示されるように、「衆生を捨てない心が初めから育っている」という【内容・原因】の側面においても認められる。また「自他は一体」であり、『大乘起信論』に比べても両者を不可分とする傾向はより強いと思われる。従って三階教とはさらに大きな異なりを見せる。

- ・ 浄土教思想においては、曇鸞、道綽、善導いずれも、菩提心の【内容・原因】について衆生救済が内在されていると認められる。一方で菩提心そのものが、念仏という【修行】による往生の前提であるのか（曇鸞、道綽）、あるいは下品の者にとっては往生の後であるのか（善導）、という【修行・根拠】の側面で相違が見られる。ただし、善導の思想にあっても、下品の者が衆生救済というものと全く無縁の存在ではないと考え得る。

比較を行った諸宗派は、相違を示しつつも共通の思想を有している。その中でもとりわけ善導浄土教の「往生後の発心」が三階教の発菩提心に比較的強い親和性を持つという見解をもって本論文を締めくくりたい。

## 註

- 1) 西本照真『三階教の研究』春秋社、1998年
- 2) 田上太秀『菩提心の研究』東京書籍、1990年、pp.14-15
- 3) 同、p.168
- 4) 同、p.176
- 5) 同、p.211
- 6) 同、p.477
- 7) 同、p.128
- 8) 西本1998年、前掲書、pp.198-205
- 9) 『発菩提心法』西本1998年、前掲書所収、p.605
- 10) 『維摩詰所説経』大正 vol.14.0553a29-b08
- 11) 『維摩経義疏』大正 vol.38.0981c20-21

(24)

- 12) 西本「三階教写本『人集録明諸経中对根浅深発菩提心法』一卷の基礎的研究」『印度学仏教学研究』61-22、日本印度学仏教学会、2013年
- 13) 同、pp.59-60
- 14) 同、p.60
- 15) 西本「杏雨書屋所蔵三階教写本『人集録明諸経中对根浅深発菩提心法』第一卷(羽411) 翻刻」『東アジア仏教研究』10、東アジア仏教研究会、2012年、p.50
- 16) 『対根起行法』西本1998年、前掲書所収現代語訳、pp.522-566
- 17) 同、p.543
- 18) 同、pp.544-547
- 19) 同、pp.547-550
- 20) 『制法』西本1998年、前掲書所収、p.580
- 21) 『対根起行法』西本1998年、前掲書所収、p.527
- 22) 池田魯参『現代語訳大乘起信論—仏教の普遍性を説く—』大蔵出版、1998年、p.87
- 23) 同、p.88
- 24) 『大乘起信論』大正 vol.32.0580b18-20
- 25) 同 0580b20-26
- 26) 同 c06-09
- 27) 同 0580c19-0581a02
- 28) 池田1998年、前掲書、p.88
- 29) 池田『詳解摩訶止観 地巻 研究註釈篇』大蔵出版、1997年、p.66
- 30) 同、p.68
- 31) 同、p.69
- 32) 『摩訶止観』大正 vol.46.0004c13-15
- 33) 高橋理空「発菩提心についての一考察」『天台学報』35 天台学会、1993年
- 34) 『妙法蓮華經』大正 vol.9.0012c11-18
- 35) 『摩訶止観』大正 vol.46.0056a12-13
- 36) 同 a18-19
- 37) 同 a23-25
- 38) 高橋1993年、前掲論文、p.123
- 39) 『摩訶止観』大正 vol.46.0006a08-12
- 40) 同 a13-19
- 41) 同 b15-20
- 42) 同、0007b18-19
- 43) 小林尚英「善導の菩提心について(1)」『印度学仏教学研究』39-2、日本印度学仏教学会、1991年、p.119

- 44) 『仏説無量寿経』大正 vol.12.0272b16-18
- 45) 同 b24-29
- 46) 同 c04-07
- 47) 小林 1991 年、前掲論文、p.119
- 48) 『無量壽経優婆提舍願生偈註』大正 vol.40.0842a15-22
- 49) 小林 1991 年、前掲論文、p.119
- 50) 同、p120
- 51) 『安楽集』大正 vol.47.0007b15-16
- 52) 小林 1991 年、前掲論文、p.121
- 53) 同、p.122
- 54) 同、p.123
- 55) 岡崎秀麿「善導における菩提心について」『印度学仏教学研究』63-1、日本印度学仏教学会、2014 年、p.48
- 56) 『観無量壽佛經疏』大正 vol.37.0251a28-29
- 57) 柴田泰山『善導浄土教の研究 第二卷』山喜房佛書林、2014 年、p.81
- 58) 『往生禮讃偈』大正 vol.47.0439a02-04
- 59) 岡崎 2014 年、前掲論文、p.49

(武蔵野大学大学院博士後期課程)